

「麻布山水図」(正倉院蔵)についての一考察

関西学院大学 小林 学

「麻布山水図」の制作時期については、奈良時代後半としつつ、個々の図様の描法や全体の作風に、平安時代に成立する倭絵の技法・表現との共通性を認め、この作品を倭絵の先蹤と位置づけるのが通説的見解といえる(「麻布山水図」の絵画様式や主題についての詳細な研究として中島博「麻布山水図について」『正倉院年報』17号,1995がある。)

しかし「麻布山水図」は、『東大寺献物帳(国家珍宝帳)』記載品ではなく、「明治初年に東大寺東南院から絵図や古文書と共に献納されたが、それ以前については明らかでない。」(中島前掲論文)ということである。それ故、制作時期を8世紀後半とすることについて、史料的裏付けがなされているわけではない。

そこで、「麻布山水図」の制作時期を奈良時代後半とする中島氏は、淡墨のぼかし塗りの手法や、海、岩山、草木の表現が、正倉院宝物その他、奈良時代の絵画・工芸作品のそれと類似していることを、その根拠として挙げられる。

確かに、「麻布山水図」に見られる波文、岩山、下草、樹木に類似する表現が、盛唐期や奈良時代の絵画・工芸作品にみられることは、氏の言われる通りである。

もっとも、それらの諸表現は、既に、漢代の画像磚、六朝時代の石棺、北周や隋代に制作された敦煌莫高窟の壁画等に見出すことが出来る。そして中国大陸からもたらされた上の諸表現は、奈良時代のみならず、平安・鎌倉時代の蒔絵等の工芸作品においても用いられているのである。

それ故、「麻布山水図」に、奈良時代の絵画・工芸作品に類似する表現が見られることの指摘のみでは、この作品の制作時期を奈良時代後半とするには不十分である。そのためには更に進んで、「麻布山水図」には、平安時代以降に見られるようになる絵画表現が、含まれていないということを、積極的に論証する必要があるだろう。

ところが、「麻布山水図」にみられる①高低差の乏しい平板な島、②ないし3本の樹木を一纏めにし、それを島内の周縁部に点在させる配置の仕方、③平板名の「る」の字に似た水禽、④釣り人、等の描き方は、奈良時代の作品に、類例を見出しがたいが、12世紀に制作された「三十六人家集」(西本願寺蔵)や「平家納経」(厳島神社蔵)には、上記①乃至④に近似する表現を見出すことが出来る。

とすれば、「麻布山水図」の制作時期は、「三十六人家集」や「平家納経」と同時代である蓋然性が高いと言えよう。

加えて、上記④の釣り人の表現には、唐代には見られないが、北宋に入ると、許道寧、郭熙、張択端らの作品の中に見られる表現が含まれている。寛和2年(986)以降、太宰府に頻繁に到着するようになる宋海商がもたらした、北宋の山水人物画の表現・技法が、我が国でも受容され、それが「信貴山縁起絵巻」(朝護孫子寺蔵)にも見られることは、すでに指摘されている。許道寧、郭熙、張択端らの活動時期と、天永3年(1112)に「三十六人家集」が制作された事情から推して、「麻布山水図」や「三十六人家集」の釣り人に見られる表現は、11世紀後半から12世紀初頭にかけて、北宋から移入されたものと解される。

以上から、「麻布山水図」の制作時期は、平安時代後期、即ち11世紀後半から12世紀にかけてと推定するのが妥当と考える。

「麻布山水図」の制作時期を、平安時代後期と解すると、当時の世俗画の体系における位置づけが、さらに問題となる。この点、本発表においては、「麻布山水図」が、中国的主題と日本の主題の両者を含む白描の絵画様式として、10世紀末頃成立する「墨絵」の流れを汲む作品であることを提唱したい。